

マキアヴェリについて 1

上 木 隆 夫

Machiavelli

Takao Ueki

は じ め に

ニッコロ・マキアヴェリ (Niccolo di Bernardo dei Machiavelli) は、1469年5月3日にフィレンツェで生まれ、1498年5月28日にフィレンツェ政庁第二書記局長、同年7月14日に「軍事委員会」書記官に就任している。そして1512年11月にその職を解任され、その後は著述に専念し、1527年6月21日に死んだ。かれが生まれた1469年は、ロレンツォ・イル・マニフィコがフィレンツェの事実上の支配者になった年であり、フィレンツェ政庁入りした1498年は、サヴォナローラが刑死し、ソデリーニを首班とする共和政権が発足した年である。またかれが失脚した1512年は、スペインの後押しでメディチ家がカムバックした年であり、かれが失意のうちに死んだ1527年は、いわゆる「ローマ劫略」の年であり、やがてイタリアは衰亡の一途をたどるのである。マキアヴェリが生きたのは、かれの祖国フィレンツェにとっても、またイタリアにとっても、まさに激動の時代であった。あらゆる思想が時代の投影だといわれるが、マキアヴェリの場合は、言葉のすぐれた意味においてそうなのである。激変する時流の体験と現実に対する深い認識・洞察とが、かれのすぐれた思想を生み出したといっても過言ではない。マキアヴェリに対する評価は、人によってあるいは時代によって極端な対立を見せる。時代によって、解釈者の政治的・思想的立場によって全く異ったいくつものマキアヴェリ像が描かれた。いわば、かれはいくつもの「異った顔をもって」¹⁾いるわけであり、その一つの顔をとり上げて誇張するならば、かれの真の姿を見失うことになるのである。したがって、かれの思想を正しく理解するためには、かれが生きたイタリア・ルネサンス時代の政治的・社会的現実を適確に把握し、その認識の上に立ってかれの著書に即して考察しなければならない。以下は、そのような方法で、マキアヴェリ思想の本質を明らかにしようとする一つの試みである。

1.

マキアヴェリが政治的に活躍した15世紀末から16世紀はじめは、イタリア・ルネサンスの文化が絶頂に達した時代である。イタリアにルネサンス文化の華をひらかせた基盤となったのは、経済の発展と都市の繁栄であり、その担い手となったのは、新興の市民階級である。新航路発見以前においては、地中海はいわば世界の海であり、ヨーロッパと中近東とをつなぐ好位置を占め

るフィレンツェ・ヴェネツィア・ゼノアなどの諸都市は、地中海を舞台とする東方貿易によって巨富を獲得し、繁栄を極める。これらの都市では、市民階級が中心となって、都市周辺の封建的土地貴族をしだいに吸収併合し、都市国家を形成する。これら都市国家では、封建的土地貴族による君主政権が成立した場合もあるが、その多くは当初共和政体をとる。しかし、都市貴族と封建貴族、貴族と市民（ポポロ）、市民内部における大市民（ポポロ・グラッソ）と中小市民（ポポロ・ミヌート）の対立、諸都市相互間の争乱の中で、やがてしだいにそれら市民階級の中で、支配権は富豪上層階級の手に帰する。早くも13世紀に多くの都市国家の政治形態は、共和政から軍事的独裁政に変る。当初の共和政的色彩をもっとも長くとどめていたのは、ヴェネツィアとフィレンツェであるが、そのフィレンツェにおいても、政治的支配の実権を握ったのは大市民（ポポロ・グラッソ）であり、ついにはメディチ家の独裁政治が実現する。

たしかにフィレンツェは自由都市であり、政治の基本原理は共和主義であった。いわば少なくとも制度上では民主政が行われていたといえる。「祖国の父」と呼ばれたコジモの時代においても、政治の最高権力は、たてまえとしては、アルテを基礎とした9人の市民からなる最高協議会にゆだねられていた。しかも最高協議会の権力行使には、さまざまな制約が加えられていた。したがって、コジモはかつて権力者にふさわしい地位・特権をもったことはなかった。ロレンツォにしても、形式上支配者の地位にはつかなかったが、複雑をきわめた共和国の制度を巧に利用して実質的には支配権を獲得し、フィレンツェに君臨したのである。しかもまさにこのメディチ家の治下において新たな経済的繁栄に赴いたフィレンツェが、1400年代のルネサンス文化の中心地となる。

このようにして、都市の支配権を握るに至ったポポロ・グラッソとは、いわゆる産業家というようなものではなくて、もっぱら商業と金融業とによって富を蓄えた大商業資本家なのであった。かれらはその発展・蓄富の過程において、中世封建制度の束縛を打破して民主政を樹立し、教会の権威に対抗して世俗的文化を築き上げていった、若々しい冒険家的な気概を失って、ひたすら現状維持に吸々とする保守貴族的な存在に墮してしまっていた。マルチン (Alfred von Martin) のいう「推移の曲線」である。《冒険文化 (Risiko-Kultur)》から《成功者の文化 (Kultur of Arrivierten)》へ、「企業精神」から「金利生活者の意識」へと移って、曲線は頂点に達し、そののちそれは次第に下降をつづけ、やがてブルジョア精神の自己放棄・宮廷風生活様式の模倣という、最終局面に到達する。²¹⁾このような政治的・社会的変遷にともなう、ヒューマンズムも変貌する。共和政治が専制独裁化するのに対応して、「ヒューマニストは共働体的な共同体としてのrepublicaを真の社会とする政治的斗争の力と情熱を失い、世間からの絶望的逃避か、あるいは宮廷の優雅な装飾に変貌する。フィレンツェにおいてすらこの変貌はルネサンスそのものの変貌を意味する。³¹⁾そしてこの変化が、マキアヴェリの政治観に重大な転回をもたらすことになるのである。

当時のイタリアは、他のヨーロッパ諸国、イギリス・フランス・スペインなどのように絶対君主のもとにおける統一国家ではなかった。教皇領およびミラノ公国、ナポリ王国などの諸君主国

家群、フィレンツェ、ヴェネツィアなどの諸共和国群に分裂し、それぞれの内部では権力の争奪がくり返され、かつそれぞれの間では勢力の均衡維持のための折衝と戦いがつづけられていて、ダンテ以来の悲願であるイタリアの政治的統一は、およそ望むべくもなかった。マキアヴェリが青年時代を過した時期には、多くの弱小国家がしだいに吸収され、周知のように、ローディの和によって、ナポリ王国、ミラノ公国、ヴェネツィア・フィレンツェ両共和国および教皇領の五大国の勢力均衡下にあった。そのキャスティング・ボートを握るのはフィレンツェ＝メディチ家であって、その豊かな財力をバックに巧みな外交によって、辛うじてバランスを保ちえたのである。「このようなバランス外交に支えられたイタリアの平和がいかに脆弱であったか¹⁾」は言うまでもない。このバランス関係が大きな破綻を来さなかったのは、強力な外国勢力が本格的に介入しなかったからであった。

時あたかもそのような情勢の中で、1492年ロレンツォは44才の若さで急逝した。1492年という年は、イベリア半島におけるイスラム最後の拠点グラナダが陥落した年であり、またコロンブスが新大陸を発見した年であって、まさに世界史的転換の時であった。そしてイタリアにとってもまた決定的な時であった。ロレンツォの死は、たちまちにしてこのバランス関係を崩壊せしめたのである。かねてより、内部対立により混乱したイタリアに対して、強大な主権のもとに近代国家へ向って着々とその歩を進めていた列強諸国の目がそそがれていたが、ついに1494年、フランスのシャルル8世がミラノ・フィレンツェ・ナポリに侵攻する。いまや「イタリアのバランスオブ・パワーを牛耳るものは、メディチ家からローマ法王庁へと変った²⁾」しかも「バランス構成の鍵を握る主要素はイタリア外の力に移る³⁾」のである。この後イタリアはたびたび列強の侵略を受け、そして急速に没落していく。

ひるがえってかれの祖国フィレンツェは、メディチ家の独裁のもとに繁栄を誇っていたが、ロレンツォの死後2年、上述したシャルル8世のイタリア遠征を機としてメディチ政権は崩壊し、サヴォナローラと指導下に共和政に移る。そのサヴォナローラは4年後の1498年に殉教し、ソデリーニを首班とする共和政権がなおつづく。マキアヴェリはサヴォナローラが殉教した5日後に、フィレンツェ政庁の書記官として採用され、政治生活のスタートを切った。そして1512年に、ドイツ軍とスペインの力を借りてメディチ家が復帰するとともに退けられた。かれは解任後、反メディチの陰謀に連座した嫌疑で逮捕投獄され、ジョヴァンニ・デ・メディチ（レオ10世）の教皇就任の恩赦によって自由の身となる。その後かれは、メディチ政府に仕官すべくさまざまな努力をするが、ついにその望を果すことができず、文筆活動に精進する。かれが死んだのは1527年6月であるが、その直前に、フィレンツェはドイツ皇帝カール5世の侵入とともにメディチ家追放によって共和政府となり、その3年後にメディチ家が返り咲く。しかしその後は、フィレンツェのみでなく、イタリア全体がスペインの支配下に入ってしまうのである。

マキアヴェリは、15年間の政治生活中、ある時は軍政にたずさわり、あるときは外交官として諸国に使いして、政治の実態をつぶさに観察し、同時にカテリーナ・スフォルツァ、チェーザレボルジア、ジョルジュ・ダンボアーズ、ユリウス2世等当代の人物に接して、政治の機微を学んだ。

特にかれをとらえたのは、チェーザレ・ボルジアとユリウス2世であった。マキアヴェリは、チェーザレに自分の力をもってしては到底太刀打ちできそうにもない途方もない人間の姿を見出し、かれの素晴らしい力に魅せられた。かれはチェーザレの政治的能力に驚嘆し、そこに混乱したイタリアを統一すべき強力な英雄の典型を見出した。またユリウス2世については、その果斷さをたえ、歴代教皇の中で最大の人物と評価している。

2.

周知のように、イタリア・ルネサンスはギリシア・ローマの古典復興である。当時のイタリアは、北方におけるような絶対君主のもとにおける統一国家は形成されず、多くの都市国家に分裂して競い合っていた。その多くは共和政を採用していたこともあって、ここでは古典古代との連続性の意識が強く、共和主義的理念が人々の関心の的になり、ここに人文主義的政治学が古典古代の政治思想の直接的受容という色彩を強く帯びることになった。⁶⁾

マキアヴェリは、この人文主義的風土に生まれ育った。当然かれは人文主義の知的洗礼をうけ古典古代の思想家達の巨大な影響下にあったと思われる。かれがうけた人文主義的教育についての記録はあまり残されていないので、確かなことは分らないが、かれの父ベルナルドは、その頃一流の人文主義者であったバルトロメオ・スカラの親友であったし、かれは幼少より父の蔵書にある古典古代の思想家・歴史家の著書、特にリヴィウスに親しんだといわれる。しかも「マキアヴェリほどの才能をもったものが、29才まで就職しなかったということ」⁷⁾を考慮しなければならない。「つまり、この鋭敏な頭脳にとって、学問の蓄積、当時の知的風土の吸収のための十分な時間があつた」⁸⁾のである。これに加えてかれが入った第二書記局は、「人文主義的伝統を守ろうとする知的エリートの集団」⁹⁾であった。したがって、かれが伝統的な人文主義の教養を身につけ共和主義的理念の持主であったことは否定すべくもない。

マキアヴェリ思想をとらえるためには、まず「^{フオルトゥナ ウイルトゥ}運命と力」の問題から出発しなければならない。かれは中世を代表するトマス・アクワイナの述べたような永遠不動の秩序を信じない。かれにとって、「地上には、なにも確固としたものはない」¹⁰⁾のであつた。この世のことはすべて運命の女神のいたずらであつて、あすの日は知るよしもない。人間をとりまくこの世界は、トマスのいう神の摂理の支配からはおよそ遠い。また、マルシリオ・フィチーノ、ピコ・デラ・ミランドラに代表されるフィレンツェのプラトン主義者たちは、自然と社会の混沌のはるかおとくに窮極の秩序を予想しこの宇宙は神の意志のあらわれである完全な調和をもった生きた無限の存在だ、という汎神論的構想をもったが、マキアヴェリにとって、宇宙の窮極的な調和というようなものな考えられない。この点、かれの立場はむしろピエトロ・ポンポナツツィによって代表されるパドヴァの自然主義に近い。

そもそも、永らく中世社会を支配したスコラ哲学は、唯名論と神秘主義によってしだいにその力を失い、14世紀に入るとその解体が進むわけであるが、その過程において、アリストテレス哲学とキリスト教的世界観の融合を企てたトマスに代って、自然主義的アリストテレス哲学が勢をもってきた。「14世紀後半から北イタリアの諸大学ことにパドヴァ大学において、12世紀のアラ

ビア人注釈者アヴェロエスの解釈によるアリストテレス解釈が新たに力をもちかえしており、これが15世紀後半には、ギリシア語原典と古代の注釈者によるアリストテレス研究に移り、そこから新たな自然主義的世界観が生まれてきた。その最初の姿がポンポナツツイに見られる¹¹⁾のである。このアヴェロエスはアヴィケンナとともにアラビアを代表する哲学者で、アラビア的思考—その徹底した世俗的精神は、イタリア・ルネサンスに大きな影響を与えた。すでに保守的貴族に成り上がり、教皇庁と密接な関係をもつに至った、メディチ家をはじめ上層階級の共鳴するプラトニズム的観照主義に対し、一般商人階級はアヴェロエズムの思考＝自然主義に近接していったとみられる。

マキアヴェリは、運命の女神のきまぐれな性格、うつり気な気性を述べ、彼女が必ずしも悪をこらして、善を助けるとは限らないことを強調する。この世のいのちある者はすべてこの女神の愛を受けて栄え、彼女のにくしみをうけて滅びるのである。マキアヴェリはしかし、絶望的な運命論者ではない。たとえ運命は気ままに変化し、その支配は強固で容易にさからえぬものではあっても、時の変化に対して行き方をかえ、運命をよく洞察し、かつ運命に対抗する力を発揮するならば、その運命を打開し、幸運に恵まれることも可能なのである。「運命は、まだ抵抗力がついていないところで、大いに力を発揮するものであり、また提防や堰ができておらず、阻止されないとみるところに猛威の鉾先を向けてくるもの¹²⁾」であり、したがって、「私は用意周到であるよりはむしろ果敢に進むほうがよいと考えている。なぜなら、彼女を征服しようとすれば、うちのめしたり、突きとばしたりすることが必要になる¹³⁾」わけである。そしてかれはその力を単なる暴力としてではなく、対象の合理的認識に基づいて、合理化し、組織化されたものとしてとらえる。このように、運命を洞察し、組織化された力をもって運命を打開していこうという点に、われわれは商業資本に支えられたルネサンス特有の合理主義のあらわれを見ることができるといえる。

以上のようなマキアヴェリの自然主義的世界観は、かれの時代認識と相まって、伝統的な人文主義的共和政理念を大きく変貌せしめることになった。マキアヴェリの共和主義についての考え方は、『リヴィウス論』で展開される。この書は、王国論と共和国論とが混在し、必ずしも純粋な共和国論とはいえないが、かれの共和政についての考えはここで述べられているわけである。本書は、『ティトウス・リヴィウスの初篇十章にもとづく論考』という原題が示すように、ローマの歴史家ティトウス・リヴィウスの『ローマ史』の最初の十章においてあげられた、ローマ共和政時代の出来事を例にして、自分の政治経綸を述べたものである。この書の中心をなすテーマは、国家を維持し、発展させるためにもっとも安定度の高い永続性をもった政体は何か、ということである。かれはまず政体を伝統的な分け方によって、君主政・貴族政・民主政の三つに分類し、それぞれの墮落した形態として、専制政(僭主政)・寡頭政・衆愚政をあげる。君主政は、はじめにもっとも賢明な人間が選ばれて君主になっている間はよいが、その地位が世襲されるからやがて専制政に変わる危険がある。貴族政や民主政も同様に墮落していく。そして原理的には、一民族は、君主政→専制政→貴族政→寡頭政→民主政→衆愚政→君主政への循環をたどるのである。それゆえ、君主政・貴族政・民主政という三つのよき政体のもつ性格をあわせ具えた政体こそ、

もっとも安定した理想的な政体だと考える。『リヴィウス論』にいう、「したがって、上述のすべての政体は、どれもこれも欠点にみちたものである。……これらの政体のどれ一つとして、そのままの形で適用することはしない。最初の三つのよき政体のもつ性格のどれをも含んだ一つの政体を選び、それをもっとも安定して堅実な政体だと判定するのである。そのわけというのも、同じ都市のなかに、君主政・貴族政・民衆政があれば、おたがい牽制しあうからである」¹⁴と。かれはこのような混合政体を共和政と呼び、歴史上、古代のスパルタ、共和政時代のローマ、マキアヴェリ時代のフランス王政がそれに当ると考える。特に、古代ローマの共和政を情熱をこめて賛美している。『リヴィウス論』にいう、「ローマの政府は執政官と元老院とからなっており、君主政と貴族政とはあったが、民衆政はとりいれられないままであった。そのため、ローマの貴族は横暴になり、人民を貴族にたいして立ち上がらせることとなった。貴族はすべてを失うことを避けるために、人民にたいして自分のもつ機能の一部を譲らざるをえなくなった。にもかかわらず、元老院と執政官は、共和国での自分たちの地位を維持しようとして、権力の多くを手放そうとしなかった。ここで護民官の創設がもたらされて、ローマ共和国はより安定したものとなり上述の三つの政体の要素が、すべてそれぞれ所を得ることとなった」¹⁵と。

すなわち、かれはどのような共和政が望ましいが、共和国の類型論を展開して、スパルタ・ヴェネツィア型共和政とローマ型共和政とを比較する。スパルタ・ヴェネツィア型は自由守護の大役を貴族にゆだねる貴族政であり、ローマ型はそれを人民にゆだねる民主政である。スパルタは一人の王と少数の元老院によって統治されていたが、人口が少かったことが少数者による支配を可能ならしめた。また外国人をうけ入れることがなかったために、それに染まって墮落することがなく、人口も増加しなかった。リュクルゴスのつくった法律をうやまってこれを遵守し、内紛のもととなるものをとりはらい、長い間団結をむねとして生活してきた。したがって、長期にわたって国家を維持できたのである。しかし、ローマはその逆をやった。平民には武力を与え、外国人には移住を認めて人口増大をもたらした。そのため騒動・内乱の起るきっかけは際限のないものとなっていた。しかし、ローマの国内がもっと平和であったとしたら、より弱体化する結果をもたらし、あの偉大な国に発展することはできなかったであろう。すなわち、人民の人口をふやし、さらにかれらに武器を与えて強固な主権を確立するために利用しようとするれば、後には、とても支配者の手に負えない存在になってしまう。しかし、人民を御しやすいようにその数を少くして、武器も与えなければ、新領土を獲得した場合、それを保持していくのは困難なのである。それゆえ、その国家を広大な領土と無限の国家権力へと拡大するためには、ローマの例にならいそのなかで起こる内紛や不和の被害を最小限にくだめねばならない。また狭小な国土にその版図をおさえておくためには、スパルタやヴェネツィアの例にならって、あらゆる手段をつくして国家が新しい領土を獲得するのを防ぐようにしなければならない。以上のように両方とも一長一短であるが、結論として、かれは内政面で弱点はあろうとも、敢えてローマ型をよしとする。『リヴィウス論』にいう、「国を建設するのにはローマ型に範を求めるべきで、その他の国家の例はならうに値しないと私は信ずる。そのわけは、この二つのタイプの折衷的な方策があるとは思え

ないからである。また、人民と元老院とのあいだにもちあがる対立関係も、ローマのような偉大な国家へと成長するためには、どうしても避けることのできない必要悪として忍ばなければならないものだと思うからである¹⁶⁾と。ここにかれの共和国論の特徴がある。「内政的視点よりも¹⁷⁾軍事・外交的視点を重視した¹⁷⁾」こと、「*stato*の問題が共和国への関心の源泉であった¹⁸⁾」ことである。

マキアヴェリは、このような観点から、君主国と共和国の比較を述べて、共和国の優位を力説する。『リヴィウス論』にいう、「国家の領土でもその経済力でも大をなしてゆくのは、かならずといってよいほどその国家が自由な政体のもとで運営されているばあいにかぎられているのを、われわれは経験から知っている¹⁹⁾」と。その理由は、「個人の利益を追求するのではなくて、公共の福祉に貢献することこそ国家に発展をもたらすものだからである。このような公共の福祉が守られるのは共和国をさしおいては、どこにもありえない²⁰⁾」からである。ところが君主国では、上述の共和国とは反対のことが起こる。「君主にとってつごうのよいことは、国家には害をもたらし、国家に役だつことは、君主にとってはつごうの悪いのがふつうだからである。したがって、自由な生活を享受している社会に、突如として僭主政治の影がさすとき、その国家はさほどの実害がおよばないばあいにしても、その社会は発展をやめて国力にも経済力にもその将来性はなくなってしまう……こういった僭主は、自分がつねづねおさえている、功績があり人格も高潔な市民たちに対して、猜疑のまなこを向けるあまり、だれにも榮譽をほどこしてやろうとしない²¹⁾」、また「……このことから、共和国は君主国にくらべてはるかに繁栄し、かつ長期にわたって幸福を享受しうることが理解できよう。なぜなら共和国では国内にいろいろな才能をそなえた人物が控えているので、時局がどのように推移しようとこれに対応していくことができるが、君主国のばあいはそうはいかない²²⁾」のである。

実において重大な転回をなしとげることになった。共和国という概念は元来ポリス、レース・プーブリカの伝統を継承し、公共の利益や自由を実現する体制で、*civile*の政治なのである。すなわち、アリストテレスにおいては、「人間は本性上ポリス的動物である」という有名な命題が示すように、ポリス（共和国）は人間共同体の最高のものであって、人間はポリスにおいてはじめてすべての必要が充され、真の人間となることができるのである。ポリスの目的は「善き生活」の実現である。したがって、ポリスは最高の完全で自足的な政治共同体でなければならない。そのため国民の人口、国土の広さ、国民の財産等理想的なものでなければならない。適度な広さの国土に、適度な数の国民が、平和のうちに、閑暇を楽しみながら、豊かでかつ節制のある生活を送ることになる。しかし、マキアヴェリにおいては、このような考え方は影をひそめる。

そもそも中世においては、政治とは、神によって与えられた秩序を如何にして維持して、人民をよき生活に導いて神のめぐみに与らしめるか、ということであって、本来人間がなにかを作り出すという意味では必要がなかった。しかしいまや秩序は神によって定められたものではなく、人間自体が作り出すもので、それが政治となったのである。それではマキアヴェリにとって人間とは何か——かれは人間の本質として野心と貪欲とをあげる。『君主論』にいう、「……人間については、一般に次のことがいえるからである。そもそも人間は恩知らずで、むら気で、偽善

者で、厚かましく、身の危険は避けようとし、物欲には目のないものである²³⁾と。また『リヴィウス論』にいう、「この野心というものは人の心のなかを強く支配しているので、人が望みのままにどんな高い地位にのぼったところで、捨て去ることはできないものである。こういうことになるのも、自然が人間をつくったときに、人間がなにごとをも望むことができるようにしておきながら、しかもなに一つ望みどおりに実現できないように仕組んでおいたからである。このように欲望のほうが、現実の実現能力をいつもはるかにうわまっているので、人間は自分のもっているものに不満をもちつづけ、なにものにも満足を感じない結果をもたらすこととなる²⁴⁾」と。すなわち、人間の行動を動かすものはかれ自身の個別的な利害関係であり、人間は本来利己的な動物なのである。利己的な本能にしたがって行動する人々の間に、なんらかの秩序を作り出そうとするのが政治となったのであるから、それはいやでも権力支配という形をとらざるをえないわけである。政治は権力支配である——これは君主国においても、共和国においても変らない。『君主論』冒頭の、「これまで人々に対して支配権 (imperio=stato) をもってきた。また現にもっている支配者は、すべて共和国が君主である」という言葉が示すとおりである。したがって、共和国も権力支配を通じて、国力を充実させ、すべてのエネルギーを結集してコンタード（周辺領域）の拡大をはかり、無限に発展していくための機構であって、人間の倫理的完成を実現する場ではなくなる。そして、国を拡大し維持する能力において、その安定度において、君主国より共和国の方がよくすぐれているのは、さきほどみたとおりである。しかし、共和国が共和国であるかぎり、自由と公共の利益とを軸とする政治的共同体であり、しかも人間は野心と貪欲によって行動する存在であるから、それは人間の自然からは生まれないのである。

3.

このような共和国が成立するための条件はなにか。スパルタや古代ローマにみられるように、はじめにただひとりの偉大な立法者がいて、絶対的な権力をおのれの手収め、共和国の建設あるいは国政の根本的な改革に当らねばならない。かれは自己の絶対的な権利を行使し、一切の妥協をしてはならない。そしてこの立法者が、自己の野心や利己心を押えて公共善のために献身しなければならない。かれは法と力、それに神への恐怖心をもって人間性の改造に努めなければならないのである。そのためには、ローマ共和政時代のように人民が自由であり、祖国のことを心から憂い、これを維持していこうと努力をしなければならない。そしてこのような自由な人間は宗教—ローマの場合はヌマによって導入された国民宗教に支えられているのである。しかしながら、マキアヴェリ時代のイタリア人はもはや自由な人間ではない。野心と欲望におどらされ、信仰心を失った奴隸的存在になりさがってしまった。そしてイタリアは政治的墮落の極にある。ヨーロッパ諸列強の侵略をうけて無政府状態に近い。

イタリアの繁栄に終止符を打った最大の理由はもとより、外国軍隊の侵入であったが、それに対抗できなかった原因としては、教皇庁の存在、傭兵制度、そしてなによりも君主・共和国の無能、無策があげられる。教皇庁がいかにイタリアに害毒をおよぼしたかを、かれは力説する。そ

の第一は、教皇庁のおかげで、イタリア人はまったく信仰心を失って、よこしまな生活にふけっていることである。しかしはるかに大きな不幸は、教皇庁がイタリアを昔からいまで一貫して分裂させていることである。『リヴィウス論』にいう、「教会はイタリア全土を征服できる力もないが、さりとてほかの国が統一を達成するのを妨害するくらいの力は具えている。そのためイタリアは一人の支配のもとで統一されることがなく、結局数名の君侯の支配を甘んじる結果となってしまったのである。こういう情況は、イタリアに内紛と弱体化をもたらして、強力な外敵でなくとも、攻めてきさえすれば、だれの手にも容易に落ちるようになってしまった²⁵⁾」と。また傭兵制については、自国を守る武力として傭兵制または外国援軍は役に立たず、危険であると説いている。「傭兵制の上に国の基礎を立てれば、将来の安全は保障されない。というのは、傭兵は無統制であり、野心的であり、無規律であり、不忠実だからである。また外国援軍は傭兵軍よりはるかに危険度が高い。そこでかれはこう結論する。「自分の武力をそなえていなければ、いかなる国といえども安泰ではない²⁶⁾」と。かくてマキアヴェリは傭兵制を廃止して、国民軍（民兵制）の創設を進言する。ソデリーニはかれの献策を入れて市民に兵役を課した。そしてかれは、フィレンツェに属する町村から兵士を徴集して1506年国民軍を結成し、徴兵問題担当官として奔走をつづけた。

しかし最大の問題は君主・共和国の無能、かれら諸小国間のあまりに小心な勢力均衡策にあった。そしてそのよって来るところは、ルネサンス商業資本のもつ矛盾にあった。当時の諸小国家のうち、君主国家群はいずれもイタリアの統一運動を企図したが、共和国家諸国はイタリア統一に反対する。つまりこれら共和国の支配層である商業資本家たちは、自己保存のためにイタリアの統一にむしろ反対するのである。なぜならば、商業資本は封建制社会の内部における生産力の発達を基盤として、ある程度までは封建社会の解体を促進するが、完全にそれをきり崩して新しい社会を作ることがを好まないからである。かれらは自分たちの取引きの障害になる封建的分裂を排除しようとしながら、同時にその独占的地位を脅かすような統一市場の成立を阻止するために封建的権力を温存しようとする矛盾の上に立っていた。小国家群に分裂して抗争し、外国の侵略に対抗しえないでいるイタリアの統一を切望する、マキアヴェリにとって、かれの祖国フィレンツェ（および諸都市国家）自体がそれを阻止する条件を内蔵していたということは、悲劇であったといわなければならない。

ここにおいて、マキアヴェリは、『リヴィウス論』執筆中に、急遽構想を変えて『君主論』を書き上げる。『リヴィウス論』は1513年頃に着手され、1517年に完成した。『君主論』はその途中1513年7月から12月にかけて執筆されたのである。共和主義者マキアヴェリは、この悲惨な情勢を打開してイタリアに統一をもたらすためには、もはや共和政をもってしては事態を拾収しえないこと、そして新しい強力な英雄的君主の出現によらねば、イタリアの統一が実現されえないことを確信する。「こうして、あたかも息たえだえのイタリアは、ただ自分の傷をいやしてくれる人物、そしてロンバルディア地方のたび重なる略奪や、王国（ナポリ王国）とトスカナ地方の搾取に終止符を打ってくれる人物、また長年にわたって化膿した傷口を治してくれる人物」を待ち

うけているのである。「イタリアはいまこの野蛮なものたちの残酷と横暴から、彼女自身を救い出してくれる人間を派遣してくれるようにと神に祈って」²⁸⁾いるのである。かれはかつてチェーザレ・ボルジアに、この偉業を達成すべき英雄的君主を期待したこともあった。だが残念ながらこの人物は、活動の絶頂期に、運命の手によって見捨てられてしまった。いまかれは、それをメディチ家に期待するのである。『君主論』がかれ自身の仕官を求めるための手段として書かれた曲論であるとの説は、事態の核心をついたものとはいえない。『君主論』はいわば、「人間性の墮落を目前にする共和主義者の絶望から生まれた君主論」²⁹⁾であった。いまやマキアヴェリは、商業資本的合理主義・ブルジョア主義的頹落から脱皮し、爛熟した共和政体の消極的な現状維持主義から、初期イタリア商人の積極的な行動的冒険主義へ帰っていくのである。

註

- 1) 会田雄次：マキアヴェリ（世界の名著16）、昭和41年、8頁
- 2) A. V. Martin：Die Soziologie der Renaissance, 1932, C.2（山本新・野村純孝共訳）
- 3) 下村寅太郎：ルネサンスの人間像（岩波新書929）、昭和50年、41～43頁
- 4) 清水純一：ルネサンスの偉大と頹廢（岩波新書825）、昭和47年、8頁
- 5) 前掲書、13頁
- 6) 佐々木毅：近代政治思想の誕生（岩波新書169）、昭和56年、34頁
- 7) 会田百次：マキアヴェリ、33頁
- 8) 前掲書、33頁
- 9) 前掲書、33頁
- 10) N. Machiavelli：L'asino d'oro（水田洋訳）
- 11) 野田又夫：ルネサンスの思想家たち（岩波新書498）、昭和37年、62頁
- 12) N. Machiavelli：Il principe, C.25（池田廉訳、会田雄次篇、マキアヴェリ所載以下おなじ）
- 13) N. Machiavelli：op. cit., C.25
- 14) N. Machiavelli：Discorsi, lib.1, C.2（永井三明訳、会田雄次篇、マキアヴェリ所載以下おなじ）
- 15) N. Machiavelli：op. cit., lib.1, C.2
- 16) N. Machiavelli：op. cit., lib.1, C.6
- 17) 佐々木毅：近代政治の誕生、68頁
- 18) 前掲書、68頁
- 19) N. Machiavelli：Discorsi, lib.2, C.2
- 20) N. Machiavelli：op. cit., lib.2, C.2
- 21) N. Machiavelli：op. cit., lib.2, C.2
- 22) N. Machiavelli：op.cit., lib.3, C.9
- 23) N. Machiavelli：Il principe, C.17
- 24) N. Machiavelli：Discorsi, lib.1, C.37
- 25) N. Machiavelli：op. cit., lib.1, C.12
- 26) N. Machiavelli：Il principe, C.12
- 27) N. Machiavelli：op. cit., C.13
- 28) N. Machiavelli：op. cit., C.26
- 29) 野田又夫：ルネサンスの思想家たち、101頁